



昭和五十年代に、みなみ野の地区に都市基盤整備公団によるニュータウン作りの構想が持ち上がりました。広さは三百九十haに及びます。この計画を受けて八王子市教育委員会が一九七九（昭和五十四）年に試掘調査を行った結果、一体には貴重な遺跡が埋もれていることがわかり、本格調査を行うことが決まりました。遺跡の範囲が広大であるうえ、「南八王子地区遺跡発掘調査団」と「南多摩窯跡群発掘調査団」を作り、手分けして調査を行うこととしました。「原始古代のみなみ野」は「南八王子地区遺跡」を紹介しているもので、みなみ野シティ内で発見された集落跡を中心に紹介しています。三十九カ所以上の遺跡が調査され、旧石器時代から近世・近代に至るまでの様々な生活の跡が発掘されてきました。

◇散歩のみどころ

八王子みなみ野シティの遺跡調査が昭和五十四年から行われ、約二十年かけて一万年以上前から近代までの人の営みが判明した。埋め戻された地上で、現在人々は生活している。今回の散歩は、JR横浜線みなみ野駅界隈を散歩し、京王線めじろ台駅までおよそ5kmの行程。

駅から線路沿いに毘沙門天へ。兵衛川を渡って、ラッパ銀杏で有名な熊野神社、福昌寺へと歩く。戻ってJRを渡り、西へ少し行くと法華寺。更に七国を横断し、階段を降りると春日神社である。参拝後、都道五百六号線を北へ。途中右へ折れ、市道を行くと宝勝寺に着く。更に旧道を北へ進むと峠山観音堂に至る。白旗権現社もこの付近。湯殿川の白旗橋を渡り、川沿いを上流へ。途中お守り地蔵を拝し、寺田町交差点を北へ。山王坂近くの要石を見学し、めじろ台駅で解散。

① 宇津貫毘沙門天堂の

スダジイ(椎の木)

八王子みなみ野二の九

毘沙門堂境内にあるこのシイの木は樹齢およそ三百年。目通り三・三m、樹高二十mの大木である。この地方では高尾山中および柚木地区にシイを見ることができ、この地ではきわめてまれである。シイの木はブナ科の双子葉植物で、ツブラジイとスダジイの二種類がある。関東地方にはスダジイが多く、果実は卵球形で大きく、先がとがっていて食用になる。



スダジイの木

さそうとう

● 佐宗棠

八王子みなみ野二の九

毘沙門天入口の階段右側には、さそうとうと言われる石仏が立派な祠の中に安置されている。

佐宗棠は中国清来の政治家で字は季高、湖南湘陰の人。會国藩の下で太平天国を平定、のち造船所など近代工業の建設、新疆の氾濫鎮圧と開発などに活躍。軍機大臣や两江総督などを歴任している。文化九年(一八二二)から明治十八年(一八八五)まで右には、大きな石碑がある。

正面に 武蔵国宇津貫

左に 願主世話人 兵五郎

弥惣治

惣村中

右に 文化卯申天

伊(仲)利吉

祥且(月)

境内には、妙法大量神の石碑。

明治二十年亥十二月十五日



佐宗様内部



佐宗様の右横
にある石碑



佐宗 様



兵 衛 川

②兵衛川

宇津貫町南端の七国峠を水源として北流し、片倉町川久保で湯殿川に注ぐ。流長四km、流域六km。宇津貫川ともいう。

流域は、住宅都市整備公団による八王子南部開発事業が進められ、みなみ野シティという大きな街に変貌している。

③宇津貫の熊野神社

八王子兵衛二の十六

熊野神社に関する記録はあまり多く残されていないが「新編武蔵風土記稿」によるとこの地は「第六天社」として紹介されている。

境内には、寛延四年（一七五二）に建てられた角石塔や、明和二年（一七六五）に造られた狛犬の像がある。これらはいずれも「奉納大六天」の文字が刻まれており、この頃すでに「第六天社」があったことがうかがわれる。

また、神社の宝物として今に伝わる麻布の幟（のぼり）には、寛政十二年（一八〇〇）二月「奉納赤山大明神御宝前 村中子ども安全」と記されており、「第六天社」同時に「赤山大明神」も合祀されていたことが分る。

神社の古文書が収納されている箱の表書きには「第六天」「赤山大権現」と並び「熊野大権現」「津島牛頭天王

「宮」との記載がある。現在の社殿に掲げられた「熊野宮」という扁額の裏には「干時 文政八年（一八二五）乙酉年七月吉日 氏子中」と記されている。

熊野の神と牛頭天王は共にスサノオノミコト（素戔鳴尊）のことであることから文政年間に共に祭祀されたものと思われる。

これから当神社は、江戸時代中期頃「第六天社」と「赤山大明神」を祭祀し創建された後、江戸時代末の文政年間に「熊野宮」と「牛頭天王宮」を合祀し、以後「熊野神社」と総称しているものと思われる。

拝殿は、古文書によると安政三年（一八五六）から文久元年（一八六一）にかけて改修、遷宮が行われたものと推察される。



熊野神社

● 宇津貫の熊野神社の石仏

階段を登り境内に入る右側に沢山の石仏が整然と安置されている。

この石仏は、以前からのものもあるが、みなみ野シティ開発の折、この神社に集められた石仏も多いという。右上の段から、

・ 地蔵尊土地守

菩薩形立像伝地蔵尊

・ 地蔵尊・地蔵菩薩坐像

・ 社母子権現・菩薩形立像相生地蔵

・ 地蔵菩薩坐像・痘除馬頭尊

・ 地蔵尊塞の神・延命地蔵菩薩立像



石塔と石仏群

また拝殿の両側には、小さな狛犬がいる。耳や手足が削げ落ちているが、形からするとめずらしい狛犬である。

向って右には

・ 明和二酉（一七六五）八月吉日

奉納大六天

向って左には

・ 明和二年八月吉日 とある。

これとよく似た狛犬が、上恩方町の龍蔵神社にもある。

●教育者・

じょうじょういっち

城定一知と発句

拝殿の中には、明治十一年八月に奉納された俳額がある。この地では幕末から昭和の初めにかけて発句が盛んであったといわれている。

明治期にその中心として活躍した人物に城定一知という人がいる。本名は宇右衛門、幼名を艶之助、俳号を一知と称し、宇津貫学会の訓導として村の子弟の教育に尽力する傍ら、俳諧を松原庵第六世長田琴通に学び



(阿形)めずらしい狢犬(呷形)



背中には明和二年八月吉日奉納第六天とある



熊野神社の俳額

「水潤亭」と号し、松原庵第七世を継承する。襲庵の披露をする直前、明治三十年三月十七日他界する。その辞世の句に「ちるもありさくもあり世は花と人」がある。
この俳額にも、幹事役としての一知の名前が見えるほか、宇津貫連十九名の名前がうかがわれる。
ちなみに、松原庵第三世には八王子にうまれた女流俳人榎本星布がいる。

●ラツパイチヨウ

八王子兵衛二の十六

国内でもあまり存在が知られていないイチヨウの変異種であるラツパイチヨウが熊野神社境内にある。樹齢は不明だが、高さ二十m以上、胸高約一・五m、幹回りが二・一m。ラツパ状の葉の出現割合が多いほど植物学的には貴重とされる。医王寺(下恩方町辺名)のもので約一割という。



ラツパイチヨウ

④ 津澤山 福昌寺

八王子市兵衛二の十三の一

宗派 臨済宗南禅寺派

本尊 十一面観音坐像

寺宝 十一面観音立像

開山 継賀宗今禅師

中興開基 後藤将監尉以治

開創 文亀元（一五〇一）年頃

当初は庵室であつた。後藤将監は小田原北条氏に仕えたといわれ、医師の館跡とも伝えられている。

この地は「殿の台」と呼ばれ、最近まで畑となっていた。

境内には薬師様や実が葉になる樹齢四百年程のカヤの古木があり、将監が医者であつたことが伺える。因みに、元八王子市長後藤聡一氏は将監の子孫という。

また、薬師堂跡と思われる場所に、円形の石像を安置し南の崖下の階段には、十王堂の遺跡を物語る石像仏が並べられている。



舟形石造仏



福昌禅寺

⑤ 七面山 法華寺

八王子七国一の三の一

宗派 日蓮宗

本尊 釈迦牟尼仏

開創 元禄二（一六八九）年

由緒によると、この寺は約三百余年前にさかのぼり、江戸時代の始め宇津貫村の村人が法華経を信仰していたため、日永上人が村の小高い丘に法華堂を建て庵としたのが始まりとか。法華信者の守護神である七面



カヤの大木

大明神を勧請したことで、宇津貫の七面さまとも称せられた。縁起では、元八王子町の七面堂を移築したものともしられている。また近年、本立寺境内に建立されていた摩利支天堂を移築して本堂にし、地域布教の道場として「法華寺」と改称した。

新編武蔵風土記稿には、「山王社、小名堂の上にあり、本尊に僧日蓮の像を安す、同群上野原（現上野町）本立寺の持、村内鎮守とせり」とある。



法華寺

●金糸大明神

八王子七国一の三の一

法華寺境内の左側奥に「金糸大明神」と刻まれた石碑がある。

江戸時代末期の十九世紀に、横浜港が開港され欧米との貿易が始まると、宇津貫村では近隣の村と共に絹を生産する養蚕が盛んになり、周囲の村々から大勢の人々が集まり養蚕の無事を祈った。桜の頃には、相模原方面からも七国峠を越えて参詣に訪ずれ、村人とともに「花見題目」を催した。



金糸大明神石碑

⑥大船の春日神社

八王子市大船町二五〇

由緒によると大永二年（一五二二）別当常光院創建のとき、奈良の春日大社を勧請したとの伝承、寛政五年（一七九三）社殿を再建、現在の社殿は昭和五十年四月造立。

新編武蔵風土記稿によると、常光院（昭和初期廃寺）の項に「小名上にあり（上大船）本山修験同郡木曾村（町田市）覚円坊の配下なり、大船山と号し不動堂、義宗という人故ありて当所に来れり、義宗は源義家の遠裔なりと云い伝へり、義宗の子撰津守義里なる者父を慕いてこの地に來たり、ともに信心を起こし、後法体となりて大阿闍梨宗覚と号し、当院を草創せり、時は大永元年（一五二二）の事なり、宗覚は当院の中興なり」とある。境内には山王権現が奉られている。



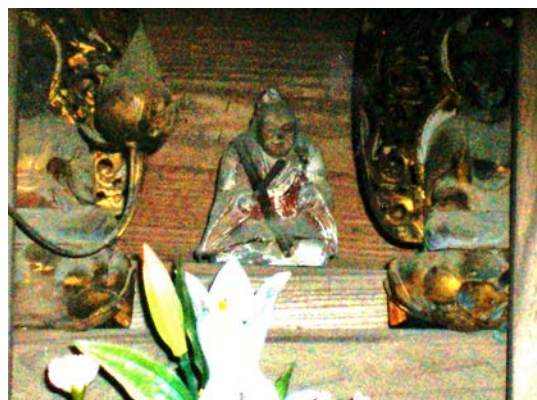
山王権現社ほか



春日神社



山王権現
大善神



山 王 様

大船町にある春日神社の階段を降りて、一般道を左に五百m程歩いた前大船バス停近くの藪の中に、三面六地藏尊と庚申塔それに馬頭観音などの石仏が安置されている。

六地藏尊正面の基壇には念仏講中と刻まれ、裏面には文政八（一八二五）乙酉七月吉祥旦と刻まれている。石仏を管理している阿部さんの話によると、道路拡張のためこの場所に移動したもので、大船集落では戦前まで庚申講が盛んに行われていたという。六道、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上のどこにいても救いの手をさしのべる六道救済のための六地藏も作られたという。

●三面六地藏



春日神社奥殿



庚申塔拡大



三面六地藏塔の側面



三面六地藏
小さな石仏は庚申塔



毛利紋



寶勝寺

寺紋は毛利紋に見られる一に三つ丸星で片倉城に関わる紋と同一であることから、大江広元の子孫、長井道広との関係があるかは不明。
寺の南側は七国峠に続く多摩丘陵が一望のもとにあり、目を転ずるとめじろ台方面の眺望もよい。

宗派 臨済宗南禅寺派山田広園寺末
本尊 釈迦如来
開山 松峰上人
開創 明応三年（一四九四）
大船町三四

⑦ 橡窪山 寶勝寺

とちくぼさん ほうしようじ



峠山観音堂

新編武蔵風土記稿によると、小比企町の旧小字は白旗と呼ばれ、白旗社も合祀、時代と共に集落の中に溶け込み、今では峠山観音堂として信仰を集めている。

寶勝寺の前の道を東へしばらく行くと道路に突き当たる。右に折れ少し上り坂になった左側に峠山観音堂がある。前の道は、七国峠への道といわれている。

⑧ 峠山観音堂

小比企町

●御頼み地蔵

小比企町

観音堂境内に三辺をブロックで囲まれ安置されたお頼み地蔵様がある。この地蔵様は病気を治したり人々の願い事に力を貸してくれる地蔵だという。この地蔵様を信仰すると頭の病気、足の病気に霊験あらたかとか。

この地蔵様は今から二百年以上前の江戸時代安永八年（一七七九）恵林というお坊さんが奉建、毎年四月十七日が縁日で地元の人のご詠歌でご供養とお祭が行われるという。

地蔵様隣の庚申塔一基には、「上小比企村講中、宝暦壬午十二（一七六二）」とあり、隣地奥の塚の上に「淳翁宗果上座、寛政十三辛酉、（一八〇一）」と刻まれている。



御頼み地蔵



お頼み地蔵全景

⑨白旗橋と権現様

しらはたばし

小比企町の湯殿川に架かる橋に白旗橋という名の橋がある。この橋はその昔、源頼朝が源氏の白旗をかかげて大軍を渡したという伝説が残っている。

新編武蔵風土記稿には「糖信なる百姓、先祖某がとき、源頼朝より白旗に記して賜りしという後、某旗を権現に祝いしにより、村内に鎮座する所の白旗権現是ならという」と記されている。



白幡橋

権現様がどこにあったか定でないが、白旗橋を南へ渡り五十m程いった所に祠が沢山残っている。今は住宅に囲まれ個人の土地になっているが、以前はその祠の前で奉を盛大に行ったという。さらに真意はわからないが、「古くは結婚式の際、お嫁さんはこの橋を渡ってはいけない」という言い伝えもある。観音堂から湯殿川に下った途中の三つ角に「三面双体六地藏」が安置されている。



三面双体六地藏



祠の中



祠 群

⑩ 守り地藏

寺田町

都道五六五号線とめじろ台グリーンヒル通りの交差点（寺田橋信号）に饅頭を商っている小さな店がある。その敷地内の角に二体の小さなお地藏さんが安置されている。

ご主人の話では「むかし湯殿川は大雨の度に堤防が決壊し濁流が田畑に流れ込み農作物に大きな被害を与えてきたその際、畑を見回っていた農家の人が濁流に足をさらわれ行方不明になったこともあった。ある朝、大雨が収まり水が引け天気になったので、先々代のお爺さんが川へ行ってみると二体のお地藏さんが川上から岸に流れ着いているのを発見し、哀れに思ったお爺さんが荷車でお地藏さん運び今の場所に安置し供養した。今では交通量が増えた道路の交通安全に一役買っている。時折地藏の前で手を合わす人の姿を見かけます。」とのこと。

◎ 参考資料

- ・ 原始・古代のみなみ野
八王子市南部地区遺跡調査会著
- ・ 新編武蔵風土記稿
- ・ 江戸名所図絵
- ・ 八王子寺院めぐり
- ・ 八王子事典
- ・ 八王子発見・路地散策案内
- ・ 八王子の歴史と文化
- ・ 八王子市史
- ・ 歴史と浪漫の散歩道
- ・ インターネット各ページ



守り地藏

参 考



遺跡の分布図 (1:20,000) ●本格調査 ▲試掘調査

時代別遺跡数

時代	旧石器	縄文	弥生後期 古墳初頭	古墳後期	奈良 平安初頭	平安	古代 中世	中世以降
遺跡名	小比企向原	小比企向原	小比企向原	小比企向原		小比企向原	小比企向原	
	滑坂	滑坂, 滑坂S	滑坂			滑坂	滑坂S	滑坂, 滑坂S
	郷田原	郷田原	郷田原					
	大原D	大原A・C・D	大原D	大原A・D	大原D	大原D	大原D	
	No.10・13 No.18・25 No.38	No.3・5・11 No.13~25 No.27~30・37 No.39・42・43 No.49~52・59	No.11	No.3・5 No.10・11 No.16・24 No.25	No.3・5 No.25	No.3・5 No.11・13 No.16・24 No.37・38 No.42・52・59	No.5・11 No.23・25 No.27・29 No.42・49 No.50・52	No.5・10~13 No.23・25 No.27~29 No.37・42 No.49・50・52
計	9遺跡	37遺跡	5遺跡	10遺跡	4遺跡	14遺跡	13遺跡	17遺跡

南八王子地区の遺跡分布

●南八王子地区遺跡

今から二十余年以上前、みなみ野の地区に都市基盤整備公団(前住宅、都市整備公団)によるニュータウン作りの構想が持ち上がった。広さは三九〇haに及んだ。この計画を受けて八王子市教育委員会が昭和五十四年(一九七九)に試掘調査を行った結果、一帯には貴重な遺跡が埋もれていることがわかり、本格調査を行うことが決った。遺跡の範囲が広大であるうえ、敷地内には古代の須恵器作りの窯跡もあったため、「南八王子地区遺跡発掘調査団」と「南多摩窯跡群発掘調査団」を作り、手分けをして調査を行うこととなった。



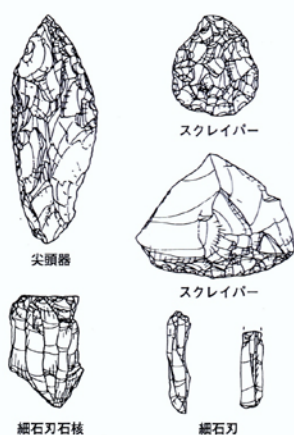
郷田原遺跡の発掘作業風景
縄文前期から中期



庚申塔(小比企向原遺跡)
中世から近世

●みなみ野で最初の住人 後期旧石器時代

人類の歴史は、今のところ約二百万〜四百万年前の古さまで確認されている。今から約一万三千年前に土器が登場するまでを旧石器時代と呼んでいる。その長い旧石器時代の最後の段階が後期旧石器時代で、ほぼ氷河期にあたる。この寒い時代になか、人々は狩りを中心に暮らしていた。ナウマンゾウやオオツノジカがいたのもこのころである。みなみ野地区でも、小比企向原遺跡、No.一八遺跡、No.二五遺跡で石器作りの場所が発見され、大原D遺跡、郷田原遺跡、No.一〇、一三、一八、三八遺跡でも、当時の石器が出土した。石器は狩りや動物の解体などに使ったものと考えられている。石器の種類や出土した地層から見て、今から約一万六千年前にはこの地に人々が住んでいたことがわかる。



旧石器時代の石器と分布
(小比企向原遺跡)

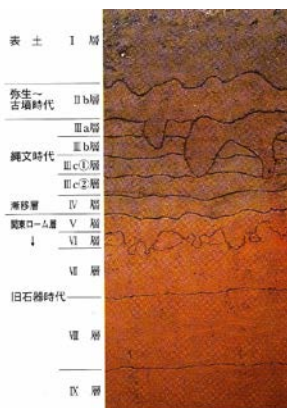


礫 群

●縄文時代の始まり 縄文草創期から早期前半

縄文時代は、今から約一万三千年前〜二千三百年前にかけて一万年以上続き、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の五つの時期に分けていゝる。草創期は氷河期が終わり暖かくなり始める時期で、日本最古の土器とされる無文土器や隆起線文土器が登場する。

みなみ野地区では大原A遺跡、小比企原遺跡、郷田原遺跡、No.一三、一五、一六遺跡から草創期後半の撚糸文土器が出土しており、今から九千五百年前に、本地域で人々が活動していたことがわかる。早期は今から約六千年〜九千年前にあたり、郷田原遺跡、No.一三、二四遺跡から押型文土器、大原A遺跡、大原C遺跡、No.一三、一五、三九遺跡から沈線文土器と呼ばれる早期前半の土器が出土しており、草創期から続く生活の跡が点々と残されている。



土層堆積状態



ゆつせつせんとうき
有舌尖頭器



撚糸紋土器

●屋外の調理場 縄文早期後半の炉穴

縄文時代早期後半になっても、みなみ野地区ではまだ住居跡は見つからなかった。しかし、炉穴と呼ばれる屋外の調理場がたくさん発見された。炉穴は地面に掘りこんだ穴の中で火をたいて食物の煮炊き、燻製作りなどをしたもので、火を燃やしたところは土が赤く変色している。

本地区では十六カ所の遺跡から計三九五基の炉穴が見つかった。とくに郷田原遺跡では一一四基、No. 一一遺跡では一四二基、No. 一三遺跡では三五基もの炉穴が発見された。

この三つの遺跡は並んで位置しており、ひとつの山の上にたくさん炉穴が集まっていることがわかった。住居跡はみつからなかったが、炉穴を作った場所で簡単な家を作り、半定住的な生活をしていたことがうかがえる。



煙出し穴の残る炉穴



炉穴やお陥^{ろあな}し穴群

●狩人の山 縄文早期の落とし穴

縄文時代早期後半には動物をとらえるための陥し穴があちこちの山に掘られた。よくみられるのが、谷の水場から山の頂上付近にかけて動物が通る場所である。陥し穴は長さ一・五m、深さが一・二m位の大きさで、底面には杭を立てるための穴が掘られている。みなみ野地区では、三四遺跡から計一二九四基もの陥し穴が発見されたが、郷田原遺跡、No. 三、No. 五、No. 二三、No. 四二遺跡などは、狩り場としての風景をよく残している。



イノシシ形土製品



大型の監視アナ

●定住集落の出現

縄文前期

縄文時代前期は今から五千年～六千年前で、早期の後半から前期にかけては最も気候の温暖化が進んだ時代で、このころから遺跡が増え規模も大きくなってくる。前期になると、本地域にもようやく住居跡が登場してくる。前期の住居跡は七遺跡から十七軒が発見されたが、前期前半の住居跡は、No.二四遺跡の一軒だけで、これがみなみ野地区でもっとも古い住居跡となる。



郷田原遺跡
(大形住居跡と地元発掘協力者の皆さん)

前期後半になると、No.二四遺跡の川向こうのNo.二五遺跡の広い範囲から住居が七軒（諸磯a式）と捨て場遺構（諸磯b式）が発見された。これが本地域の最初に作られた集落になり、土器、石器もたくさんみつがっている。

●縄文時代の最盛期

縄文中期

縄文時代中期は今から約四千年～五千年前とされている。この時代の特徴は、数百軒単位の大規模な集落の跡が発見され、大量の土器、石器が作られている。集落の中には広場や墓地、あるいは土器捨て場を作り、重なり合う住居跡は長期間の定住の間に住居を何度も作り替えたことを示している。

みなみ野地区では、小比企向原遺跡で百七十六軒、滑坂遺跡で七十三軒、No.一一遺跡で二十三軒の住居跡が発見されている。一方で山間部に住居跡が一軒あるいは二軒のみで存在する遺跡もあり、このような住居跡については見張り小屋、野営小屋などの目的が考えられている。



じゅうきよないの うめがめ
住居内の埋亀
(小比企向原遺跡)



空からみた滑坂遺跡

●稲作の開始・弥生時代

弥生時代は、紀元前四世紀〜紀元後三世紀までの時代をいう。稲作が始まり、金属器が使われ、小さな国がいくつも生まれて朝鮮半島や中国大陸との交渉をもち始める。本地区では水田耕作に適した場所がほとんどないため、弥生時代の後期になってようやく集落を営み始める。

最初の集落はNo. 一遺跡だが、ここでは、弥生後期の住居跡が計五軒みつかっている。そして、弥生時代の終末から古墳時代の初頭にかけては、No. 一遺跡と同一丘陵上の郷田原遺跡で十軒、谷向こうの大原D遺跡で五軒の住居跡が作られている。



弥生時代の土器

●カマドの登場・古墳時代

古墳時代は、三世紀代の後半から七世紀代にかけての時代で、国家の統一が行われ、全国各地に有力者の古墳が作られる。みなみ野地区では古墳時代に入っても普通の集落の営みが続けられるが、小比企向原遺跡で十九軒の住居跡が発見されており、この他に集落はみつからなかった。

古墳時代後期になると様子は大きく変わり、大原D遺跡（二十三軒）を中心に、No.三遺跡（九軒）、No.五遺跡（七軒）、大原A遺跡（八軒）、郷田原遺跡（五軒）、小比企向原、只沼遺跡、殿台遺跡、No.一一遺跡、No.一六遺跡、No.二五遺跡に各一軒ずつと、各所に小さな集落が広がっている。古墳時代の中期には竪穴住居のなかにカマドが設けられるようになり、平安時代まで続く。



カマド出土の土器
（大原 D 遺跡）



古墳時代前期の火災住居跡
（小比企向原遺跡）

●律令制の時代・奈良時代

奈良時代は、七一〇～七九四年（あるいは七八四年）の間を指す。大化の改新（六四五年）から進められた律令体制が整っていく時期で、平城京を中心に仏教文化が栄える。

この時代のみなみ野地区では、生活の跡があまり発見されず、郷田原遺跡で五軒、No.三遺跡で一軒、No.二五遺跡で一軒の計七軒の住居跡がみつかっただけである。

奈良時代の終りから平安初期にかけての時期も、No.三遺跡で一軒、No.五遺跡で一軒、大原D遺跡で二軒と少なく、こうした人口の少ない状態は九世紀の後半まで続く。



奈良時代の住居跡
(郷田原遺跡)



奈良時代の集落
(郷田原遺跡)

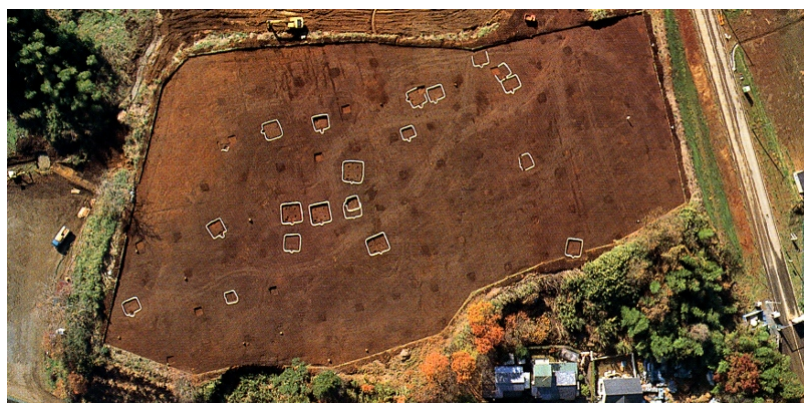
● 御殿山窯の登場 平安時代

平安時代は、一般に平安京遷都(七九四年)から鎌倉幕府成立(一一九二年)までの約四百年間を指し、藤原氏を中心に華やかな文化が栄え、王朝時代とも呼ばれている。

みなみ野地域では、九世紀の半ば過ぎまではNo.三遺跡と大原D遺跡で数軒の集落がある他は、点々と単独の住居跡が見つかるだけである。みなみ野地区の南部から西方にかけては南多摩窯跡群と呼ばれる須恵器作りの窯がたくさんみつまっている。須恵器は千百度位の高い温度で焼くため、それまでの土師器という赤焼きの土器より丈夫で、たくさん作られている。

みなみ野地区には、南多摩窯跡群の御殿山窯というグループがあり、ここでは相模国や武蔵国で使う須恵器が焼かれていた。御殿山窯で須恵器作りが一番さかんになるのは九世

紀後半から十世紀代だが、このころこの地域に急に人々が増えたようである。たぶん須恵器作りの職人や関係する人々がやって来たのではないか。



古墳時代～平安時代の集落
(空からみた遺跡)

●中世から近世へ

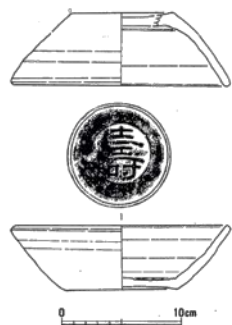
一般に、中世とは鎌倉幕府成立から江戸幕府成立までをいい、近世は江戸時代をさす。中世になると堅穴住居跡は姿を消し、みなみ野地区で発見されたものとしては、中世から近世にかけての段切り、掘立柱建物跡、井戸跡などである。段切りとは斜面をけずり出して平らにした生活面のことで、ここに建物跡や井戸が作られている。遺物は十五世紀から十九世紀の陶磁器が出土している。また、新しい時代では近代の墓地や炭焼窯などもみつかっている。



井戸跡

●近世から近代へ

三百年近く続いた江戸時代は、明治維新により近代の世の中へと変わっていく。みなみ野地区では、炭焼窯やエナツボが発見されている。また、太平洋戦争で空襲を受けたときの焼夷弾が地面に深く突き刺さっているのもいくつか発見されている。



エナツボ
(郷田原遺跡)



近代の炭焼窯

◎参考資料

- ・ 原始・古代のみなみ野
八王子市南部地区遺跡調査会著
- ・ 新編武蔵風土起稿
- ・ 江戸名所絵図
- ・ 八王子寺院めぐり
- ・ 八王子辞典
- ・ 八王子発見・路地散策案内
- ・ 八王子の歴史と文化
- ・ 八王子市史
- ・ 歴史と浪漫の散歩道
- ・ インターネット各ページ
- ・ 八王子市郷土資料館資料
- ・ 八王子市地図
- ・ 八王子市観光マップ
- ・ 昭文社

一メモー